

平成17年 12月5日	農作物病害虫発生予報 12月	山口県病害虫防除所 山口県農業試験場
----------------	---------------------------------	-----------------------

～目次～

予報の概要	1
予報		
【主要病害虫】	2
【その他の病害虫】	6
病害虫・農薬情報		
病害虫メモ	冬期の果樹病害虫防除について	7
循環型農業メモ	総合的病害虫管理（IPM）の考え方	7
農薬メモ	薬剤感受性の低下について	8
参考	9

予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	平年並	平年並	前年並
	うどんこ病	平年並	平年並	多
	アブラムシ類	少	少	多
	ハダニ類	やや少	やや少	少
	ハスモンヨトウ	やや少	やや少	少
アブラナ科野菜	コナガ	やや少	やや少	少

作物	担当者
普通作	野崎（病害） 山本（虫害）
果樹	村本（病害） 殿河内（虫害）
野菜	岡田（病害） 岩本（虫害）
茶	岩本（病害虫）

お問い合わせ先	
TEL	（083）927-4006
FAX	（083）927-4071

予報

【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%(平年1.5%)、発病株率は0%(平年0.03%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、12月の気温は平年に比べ低い(-)。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

被害果や被害茎葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

< 防除のポイント >

ア ジカルボキシイミド系薬剤(スミレックス剤、ロブラール剤)は一部で、ポリオキシシン剤は広範囲で耐性菌が出現しているため、使用後は必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は使用を控える。

イ メトキシアクリレート系薬剤(アミスター剤、ストロビー剤)は耐性菌が出現しやすいため連用を避け、他系統の薬剤との体系防除を実施する。

表 イチゴ灰色かび病の耐性菌検定結果(平成17年4月検定)

採取場所	調査ほ場数	供試菌株数	スミレックス剤(ジカルボキシイミド系薬剤)				ポリオキシシン剤			
			耐性菌発生ほ場数	耐性菌株数	耐性菌発生ほ場率(%)	耐性菌率(%)	耐性菌発生ほ場数	耐性菌株数	耐性菌発生ほ場率	耐性菌率(%)
下関市	4	17	1	1	25	5.9	4	17	100	100
下関市(旧菊川町)	2	9	0	0	0	0	2	9	100	100
下関市(旧豊田町)	1	4	0	0	0	0	1	4	100	100
山口市	1	5	1	1	100	20	1	4	100	80
柳井市	1	2	1	1	100	50	1	1	100	50
田布施町	1	3	0	0	0	0	1	3	100	100
県内合計	10	40	3	3	30	7.5	10	38	100	95

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は31.6%（平年27.0%）、発病株率3.1%（平年5.5%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では12月の気温は平年に比べ低い（-）。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

被害果や被害茎葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

< 防除のポイント >

ア 発病前の予防または、発病初期の防除を徹底する。

イ 発生した場合、発病した葉の葉かぎを行い伝染源を除去した後、治療効果のある薬剤を用いて防除を実施する。

ウ 同一薬剤の連用並びに同一系統の薬剤間での輪用は避ける。

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は10.5%（平年33.0%）、寄生株率は2.3%（平年6.7%）で平年に比べ少なかった（-）。

イ 気象予報では、12月の気温は平年に比べ低い（-）。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

局所的に発生することが多く、多発後の防除は困難なので、下葉の葉かきをこまめに行う一方、ほ場をよく観察して早期発見に努める。

< 防除のポイント >

ア 開花期以降に薬剤散布を行う場合は、訪花昆虫に影響の少ない薬剤を使用する（日本バイオリジカルコントロール協議会HP（<http://www.biocontrol.jp/>）等を参考）。訪花昆虫の巣箱を施設外に出して薬剤散布を行う場合は、薬剤の影響

響が無くなってから巣箱を施設内に戻すようにする。

イ 発生が局所的である場合は部分散布を行う。また、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は10.5%(平年12.0%)、寄生株率は0.8%(平年1.9%)で平年に比べやや少なかった(-)。

イ 気象予報では、12月の気温は平年に比べ低く、降水量は平年並みである(-±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

局所的に発生することが多く、多発後の防除は困難なので、下葉の葉かきをこまめに行う一方、ほ場をよく観察して早期発見に努める。

<防除のポイント>

ア ナミハダニ(黄緑型)の肉眼での発見が困難な場合は、拡大鏡などで確認するか、葉裏に白紙を擦り付けてハダニが潰れた赤や薄緑色の跡の有無を確認する。

イ その他については、アブラムシ類の<防除のポイント>を参照する。

5 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	-

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は10.5%(平年19.0%)、寄生株率は0.4%(平年1.5%)で平年に比べやや少なかった(-)。

イ 気象予報では、12月の日照時間は平年に比べ少ない(-)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 日光が差して気温が上昇してくると葉や蕾の食害を始めるので、ほ場をよく観察して捕殺する。

イ 施設栽培では葉の裏や鉄骨パイプ等に産卵することが多いので、黄褐色の毛に覆われた卵塊を見つけ次第捕殺する。

<防除のポイント>

アブラムシ類の<防除のポイント>ア、ウを参照する。

アブラナ科野菜

1 コナガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	若齢幼虫時

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、キャベツでの発生ほ場率は16.7%（平年31.6%）、10株当たり虫数は0.2頭（平年1.8頭）で平年に比べやや少なかった（-）。

イ 山口市大内のフェロモントラップにおける11月の誘殺数は、平年に比べ少なかった（-）。

ウ 気象予報では、12月の気温は平年に比べ低く、降水量は平年並みである（- ±）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。

イ 昨年美東町において薬剤抵抗性を検定したところ、BT剤やスピノエース剤、アフーム剤は効果が高く、有機リン系薬剤、ピレスロイド系薬剤、IGR剤は効果が低かった（図参照）。産地によって抵抗性の程度は異なるため、散布後は必ず防除効果を確認し、効果が劣る場合は使用を控える。

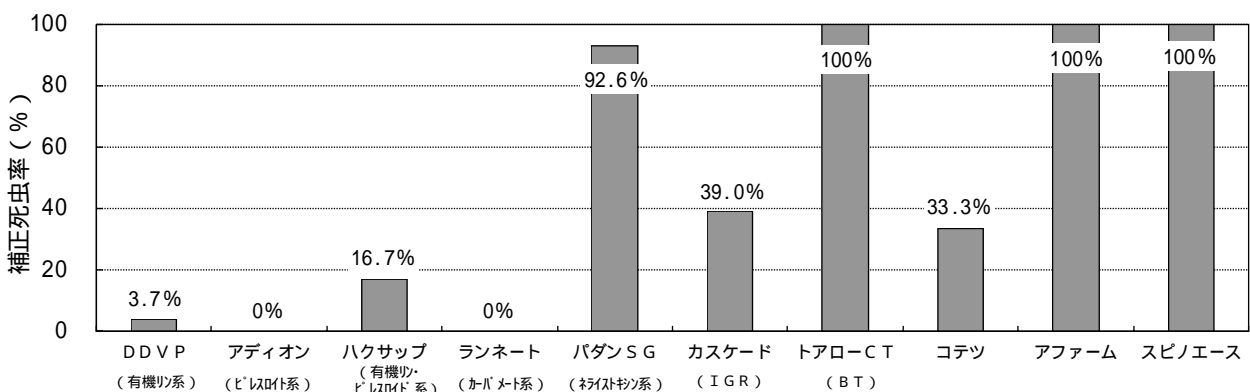


図 コナガの薬剤抵抗性検定結果（平成16年8月美東町産供試、葉片浸漬法）

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
アブラナ科野菜	ウワバ類	やや多	多	多	42 (キャベツ)	20	
野菜全般	ハスモンヨトウ	やや多	多	多	33 (キャベツ)	15	県内6か所のフェロモントラップの誘殺数は、地域によってばらつきがあるが、全体的に平年並みであった。
	オオタバコガ	多	多	多	50 (キャベツ)	12	山口市のフェロモントラップによる11月の誘殺数は平年に比べ多かった。
	シロイチモジヨトウ	多	多	多	8.3 (キャベツ)	1.2	山口市のフェロモントラップによる11月の誘殺数は平年に比べやや多かった。

病害虫・農薬情報

病害虫メモ

冬期の果樹病害虫防除について

冬は病害虫の防除において重要な時期です。冬の間には病害虫の「火種」を少しでも減らすことが、来年の実りへの第一歩だと考えていただきたいと思います。

< 耕種的防除 >

- ・ 園地環境の改善：混み合った枝の剪定、縮伐、間伐を行い、日当たりや湿度環境を改善すると、病気や害虫が発生しにくい環境になります。また、農薬がかかりやすくなり、十分な防除効果を得られます。
- ・ 越冬病原の除去：剪定時などに病斑の削り取りや剪除を行うことで、病気の発生が少なくなります。また、落ち葉にも病斑があるので、落ち葉処理も有効です。
- ・ 越冬害虫の処理：秋口に主幹や主枝に肥料袋等を巻いて害虫を誘い込み、2月頃にこれを外して焼却します。また、ブドウなど樹皮がはがれやすいものでは、春までに粗皮はぎを行えば、樹皮下で冬越しする多くの害虫を除くことができます。

< 薬剤防除 >

- ・ マシン油乳剤によるハダニやカイガラムシなどの難防除害虫対策：春～秋と異なって高い濃度で散布でき、非常に高い効果が期待できます。樹勢の弱い樹には使用しない、カンキツでは厳寒期や収穫直後の散布をさけるなどの留意が必要です。これらの剤は化学農薬と違い、油が害虫を窒息させて殺すことから、薬剤抵抗性が発達しないことも魅力です。

カンキツ（機械油乳剤95等：冬期・30～45倍；アタックオイル、トモノールS、ハーベストオイル等：12月～3月・60～80倍）

ナシ、リンゴ、カキ、モモ（機械油乳剤95等：冬期・16～24倍）

- ・ 病害の発芽前防除：休眠期の薬剤散布が効果のある病害も多く、発芽前までに下記のような薬剤を使用することも重要です。

ICボルドー66D（カンキツかいよう病：40倍、等）、石灰硫黄合剤（リンゴ黒星病：7倍、等。ハダニ、カイガラムシ類にも効果）、パスポートフロアブル（ナシ黒斑病：250～400倍、ブドウ晩腐・黒とう病：250倍、等）、ホーマイコート（ブドウ晩腐・黒とう・枝膨病：50倍、モモ縮葉病・スモモふくろみ病：50～100倍、等）、ベフラン液剤25（ブドウ晩腐・黒とう・褐斑病：250倍、リンゴ腐らん病：500～1,000倍等）

（専門研究員 東浦祥光）

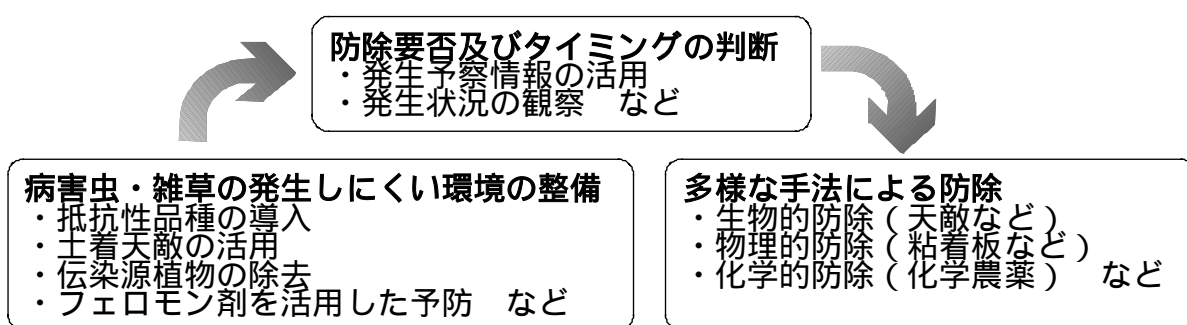
循環型農業メモ

総合的病害虫管理（IPM）の考え方

総合的病害虫管理（Integrated Pest Management，略称IPM）とは、経済性を考慮しつつ、病害虫による被害を抑えるための手段を総合的に講じ環境への負荷軽減とともに、安全な農作物の安定生産の両立をめざす考え方です。

具体的には、輪作、抵抗性品種の導入、土着天敵・フェロモン剤の活用、伝染源植物の除去など病害虫が発生しにくい管理を行い、万一、病害虫が発生した場合は生物的・物理的・化学的手法を組み合わせた総合的防除技術を駆使することで、病害虫の発生を経済的被害が生じるレベル以下に抑制しようとするものです（図参照）。IPMの普及に向け、県では水稻のIPM実践指針を策定しているところです。この考え方に基づき農作物の生産に取り組まれてみてはいかがでしょうか。（専門研究員 山本顕司）

【判断】



【予防的措置】

図 総合的病害虫・雑草管理（IPM）の体系

【防除】

農薬メモ

薬剤感受性の低下について

同一の成分や系統の薬剤の連用により、病原菌や害虫に対する効果が低下することを薬剤感受性の低下といいます。これは薬剤の連用によって、病原菌や害虫が薬剤に対する抵抗性を獲得し、その薬剤に強い個体が生き残るために起こります。代表的な事例としては、病害ではイネいもち病(有機リン系剤、MBI-D剤)、イチゴの灰色かび病、炭疽病(ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤)、害虫ではコナガ(有機リン系剤、カーバメイト系剤、ピレスロイド系剤、BT剤、IGR系剤)、ハスモンヨトウ(有機リン系剤、カーバメイト系剤、ピレスロイド系剤)、ミナミキイロアザミウマ(有機リン系剤)などがあります。

薬剤感受性の低下を防ぐには、作用性の異なる系統の薬剤を順番に使用(薬剤のローテーション)し、発病した葉・株の除去やシルバーマルチなどの物理的防除及び拮抗菌や昆虫病原性糸状菌、寄生蜂などの生物農薬を併用するといった方法があります。この他にも、病害虫の生態体や発生に応じた的確な防除を行い、無駄な薬剤散布を行わないことも大切です。（研究員 岩本哲弥）

参考

1 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報(12月2日福岡管区気象台発表)

予報	高い(%) 多い	平年並(%)	低い(%) 少ない
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	10	40	50

週ごとの気温傾向

予報	高い(%)	平年並(%)	低い(%)
1週目	10	10	80
2週目	20	30	50
3~4週目	20	40	40

2 12月のテレホンサービスの内容(予定) TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	12月の発生予報、イチゴ病害虫の防除、カンキツ病害虫の冬期防除
下旬	イチゴ病害虫の防除、カンキツ病害虫の冬期防除、臭化メチルの使用禁止について